

生命の海科学館ホールの首長竜の化石
(レプリカ)



り下げられた首長竜の化石(レプリカ)を、目をキラキラさせながら「恐竜だ!」と指差す子供の姿をよく見かけます。でも、首長竜は実は恐竜ではないのです。首長竜は海にすむ爬虫類で、ヒレのつき方などからだのつくりが恐竜と異なります。また、化石を調べると、進化の歴史も恐竜とは違う生物であることがわかりました。そして、「ピー助は陸を歩いていましたが、本当は、首長竜は陸に上がることができませんでした。」海中での生活に適応し、重力

に逆らつてからだを保つ必要のない首長竜の骨格は、陸上ではからだを支えられずに自分の重さでつぶれてしまっただろうと考えられているのです。

最後には、「ピー助はタマゴから産まれたけれど、実際には、首長竜が陸上に産み落とされたタマゴからかえるということはなかったのです。」首長竜は、卵胎生(卵を産む魚類・爬虫類などの動物が、胎内で卵をかえして子を産む繁殖方法)だったと考えられているのです。首長竜に近い当時の海にすむ爬虫類が卵胎生であったことを示す化石が発見されています。

わたしは、この企画の準備をしながら、もしかしたらこのようなお話は、映画を見てピー助のことが大好きになった子供たちの夢を壊してしまうのではないかという心配が心に浮かびました。しかし、化石からどのようにして首長竜の姿が復元されてきたか、化石から浮かび上がってきた首長竜の姿はどのようなものかを子供たちに伝えることが、新しい夢の種をプレゼントすることになると考えたのです。子供たち自身が、学び

目をキラキラと輝かせて館内を見学する子供たち



考える体験を経て育てることのできる、「科学の種」です。

はたして、化石からわかる首長竜の姿に関する話が終わり、実際に首長竜や魚竜など恐竜時代の海の爬虫類の化石を観察するときになると、目を輝かせた子供たちからさまざまな質問が飛んできました。映画の力やピー助の魅力とは違う、本物の化石のもつ力、科学の魅力が「小さな種」となって子供たちの心に届いたのではないのでしょうか。

恐竜は小さな科学の種

子供に限らず、社会全体の科学離れが進む近年、科学館の大切な役割の一つには、科学の種をまき続けることや、それを育てたいと望む皆さんのお手伝いをすることです。この夏、心に届いた小さな種を芽吹かせてみたくなったら、ぜひ科学館に遊びに来てください。首長竜だけでなく、地球・生命の歴史を物語るたくさんの化石や岩石が、皆さんをお待ちしています。

生命の海科学館も、今年の夏は恐竜に関連した企画展を開催します。題して、「手のひらにのる恐竜たち」。どうぞお楽しみに!



生命の海科学館
学芸員 山中敦子